

テリトリーオの視点から描く地域構造の枠組みに関する研究 -イタリアを対象として-

メンバー：田中碧衣（代表者） 近畿大学大学院 都市歴史研究室 修士1年
吉田真子 近畿大学大学院 都市歴史研究室 修士2年
樋渡彩（指導） 近畿大学工学部建築学科 講師

訪問国：イタリア

訪問先：ロコロトンド、チステルニーノ、アルベロベッロ、モノーポリ、ボローニャ、ガッリーポリ、
パルマと郊外、モデナ、プロチダ 他

研究背景

本研究は、山間部から海岸部を含む広域な視点から産業や文化で成り立つテリトリーオを再構築するものである。テリトリーオとはイタリア語で「地域」を意味する言葉であり、イタリアではテリトリーオの研究が先進的に行われている。

研究目的

本研究では、イタリアに根付く様々な産業について歴史、文化、気候・風土、町の景観、交通・流通、地理条件、食などの様々な枠組みを横断して、これらが結びついて成り立つ地域構造を見ていく。

また、各産業や文化が持つテリトリーオの重なりや形の類似点から、産業同士の関係性を考察し、イタリアの新たな一面を見出すことに繋げる。



今回調査したテリトリーオ
Sistema Informativo Territoriale Regionale発行の航空写真に田中が追記

調査行程

田中

日付	場所
8月6日	東京→メストレ
8月7日	
8月8日	メストレ→ポローニャ
8月9日	ポローニャ
8月10日	
8月11日	ポローニャ→ヴェローナ
8月12日	
8月13日	ヴェローナ→モノーポリ
8月14日	モノーポリ
8月15日	
8月16日	アルペロベッロ,ロコロトンド,チステルニーノ
8月17日	ガッリーポリ
8月18日	ナポリ
8月19日	アマルフィ
8月20日	プロチダ
8月21日	
8月22日	モデナ
8月23日	
8月24日	モデナ→バルマ
8月25日	
8月26日	バルマ
8月27日	
8月28日	
8月29日	
8月30日	
8月31日	ヴェネツィア
9月1日	
9月2日	メストレ→東京→広島
9月3日	
9月4日	
9月5日	
9月6日	

調査で重視したこと

今回のイタリア調査では、現地の人
の生活や文化を実際に見て体験をする
ことを重視した。

特に食文化について、地域の代表的
な料理を食したり、惣菜店やスーパー
マーケットで食材を買ったりと、食の
テリトリーオにおける消費の部分を現
地で自ら経験することを意識した。こ
れによって資料や文献には表れにくい
地元民の日常的な食への観念を知りたい
と思った。

また、食以外にも各地の建築やお祭
りを見学することでその地域で大切に
されている風土や習慣を意識した。



生ハム専門店で食材
を見ながら買い物
をした
撮影：田中碧衣



モデナのマーケットで買い物
をする馴染客と店主
撮影：樋渡彩

吉田

日付	場所
8月3日	クール→ピネロロ
8月4日	ピネロロ
8月5日	
8月6日	ピネロロ→エウガネイ
8月7日	エウガネイ→メストレ
8月8日	メストレ→ポローニャ
8月9日	ポローニャ
8月10日	
8月11日	ポローニャ→ヴェローナ
8月12日	
8月13日	ヴェローナ→モノーポリ
8月14日	モノーポリ
8月15日	
8月16日	アルペロベッロ,ロコロトンド,チステルニーノ
8月17日	ガッリーポリ
8月18日	ナポリ
8月19日	アマルフィ
8月20日	プロチダ
8月21日	
8月22日	モデナ
8月23日	
8月24日	モデナ→バルマ
8月25日	
8月26日	バルマ
8月27日	
8月28日	バルマ→メストレ
8月29日	ヴェネト州
8月30日	
8月31日	
9月1日	
9月2日	ポローニャ
9月3日	
9月4日	
9月5日	
9月6日	
9月7日	
9月8日	
9月9日	ミラノ→大阪
9月10日	
9月11日	

調査で重視したこと

現地を訪れることでしか得ることの
できない土地に根付いた建築空間
を、三次元的に体験し自分の感覚で
捉えることをである。

このテリトリーオ研究は、写真や
図だけでは全てを伝えきれない。場
所の生活感、住んでいる人の時間感
覚、町の色や香りなど、本人が町に
迷い込んで初めてわかる「体験」が
必要不可欠である。事前に日本で作
業を行ったのちに実際に歩いてみる
と、町の空間は壮大に積みあがった
時間の集積であることに気づく。そ
の空間のアイデンティティが無二の
ものであることを理解し、複数の側
面から地域の構成を考察することを
楽しんだ。



アマルフィの路地空間
撮影：吉田真子

花崗片麻岩と石灰岩の住まいのテリトリーオ

ピエモンテ州のピネロロ、チェザーナ、ロウレで見られる花崗片麻岩で作られた石積みの住まいと、プーリア州のロコロトンド、チステルニーノ、アルベロベッロ、モノーポリで見られる石灰の漆喰による白壁の住まいの比較を行った。

前者の石積みの住まいは、トリノ県の**スーザ溪谷 (Val Susa)**で見ることができる。今回の調査では溪谷沿いの小さな集落を2カ所を訪れた。

後者の漆喰の住まいは**ムルジャ**と言われる石灰岩の台地上の地域に見られる。

アルベロベッロ周辺では、田園地帯の中のトゥルッロを実測したことで、スケール感や素材感、手作り感を観察することができた。
このように**北部と南部で異なる地域特有の材料**を使用している。そして、その地域の**地層が建築に表れている点**が非常に興味深かった。

花崗片麻岩で作られた住まい



石積み（どこからの石かは不明）のアーチ構造が見えている（ピネロロ）
撮影：吉田真子



川のほとりに形成されたアルプスの町（チェザーナ）
撮影：吉田真子



石積みの壁の建物（チェザーナ）
撮影：吉田真子



ナイス・グラニトイディ (Gneiss granitoidi: 花崗片麻岩) の建物（ロウレ）
撮影：吉田真子

石灰の漆喰で塗られた住まい



丘上にそびえる白壁の町（ロコロトンド）
撮影：吉田真子



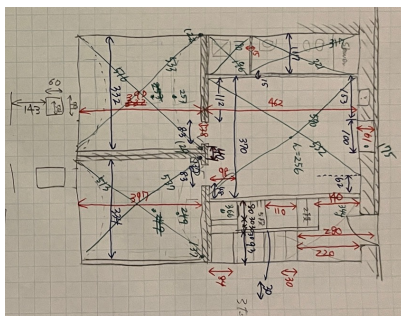
袋小路と外階段の街並み（チステルニーノ）
撮影：吉田真子



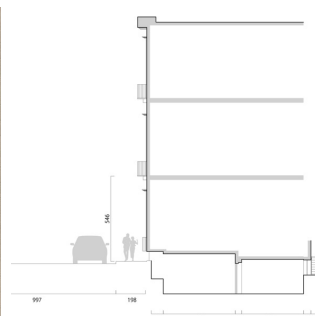
田園にボツンと佇むトゥルッロ（アルベロベッロ周辺）
撮影：樋渡彩



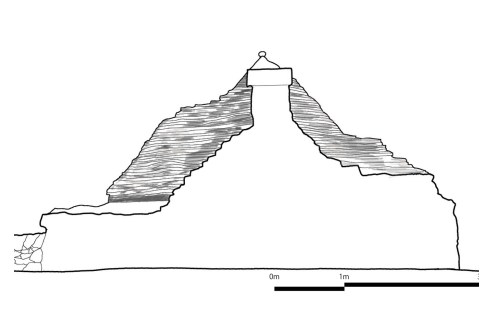
マリア像の手入れをする地元民（モノーポリ）
撮影：吉田真子



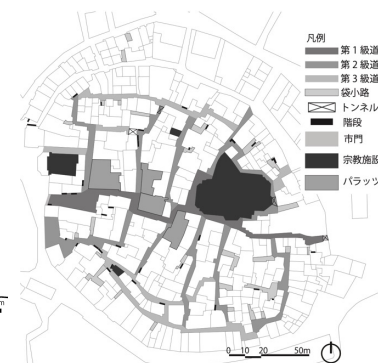
モノーポリのカンティーナの宿 野帳
画：吉田真子



モノーポリのカンティーナの宿 断面図
作成：吉田真子



実測したトゥルッロの立面図
作成：田中碧衣



施設分布図と道路の階級分類図（ロコロトンド）
作成：田中碧衣、樋渡彩

絹産業と油産業のテリトリー

ボローニャにおける絹産業と、ガッリーポリにおける照明用のオリーブ油の搾油産業の2つのテリトリーの調査を行った。

ボローニャでは、水路を活用した絹産業が中世からの町の形成に深く起因している。自転車を利用して丘の上の水門の撮影を行うことができた。細いルートもたどることができ、土地の勾配も把握することができた。建築空間は残っていないが、博物館展示資料や地区割から考察を進める予定である。

ガッリーポリは城塞都市である。この町には、修道院などの地下に「フランク・トイオ」と呼ばれる搾油施設や製造したオリーブ油の保管倉庫があった。今回は搾油の様子が展示されている博物館を見学し、**産業の概要を掴んだ。**

実際にプーリア州では、オリーブ畑をよく目にした。中には数百年前の大木が群立する畑もあった。



絹産業



背後に山を持つボローニャ
(ボローニャ) 撮影：田中碧衣



製粉跡のホテル 実測図面
作成：吉田真子

実測したホテルは、
1797~98年ごろに織物のし
わ寄せ加工を行う工房とし
て使われていたとされる。
モリーネ用水（Canale
delle Moline）に面してお
り、**水と産業が深く関わっ
ていたことを知った。**



運搬に使われた水門
(ボローニャ) 撮影：吉田真子



糸巻きの機械
(ボローニャ)
Museo del Patrimonio Industriale



染織工房の跡
(ボローニャ) 撮影：吉田真子



絹で作られたヴェール
(ボローニャ)
Museo del Patrimonio Industriale

油産業



オリーブの木々
(プーリア州) 撮影：樋渡彩



樹齢数百年のオリーブの木の実測
(プーリア州) 撮影：樋渡彩



搾油機
Hypogeum Oil Mill of Palazzo
(ガッリーポリ) 撮影：田中碧衣



オリーブ油の製品
(ガッリーポリ)
Hypogeum Oil Mill of Palazzo



オリーブ油の樽の出荷を描いた絵図
(ガッリーポリ)
Hypogeum Oil Mill of Palazzo

食産業のテリトリー

パルマ周辺で営まれているプロシュット・ディ・パルマやパルミジャーノ・レッジャーノ、ワインやパスタ、トマト缶など、イタリアを代表する食産業のテリトリーを調査した。

パルマ郊外には、これらの食産業の博物館があり、数箇所を見学した。博物館では、加工するための道具の大きさや質感、仕組みを知る事ができた。

また、プロシュット・ディ・パルマの生産拠点であるランギラノという町を訪れ、**生ハム祭りに参加**したり、**生ハム工場の見学**をしたりして、**町人々にとっての産業に対する認識を知る**ことができた。そして、モデナのPoderi Fioriniでのブドウ畑の見学、カゼッロという伝統的なチーズ工場の跡地の見学、トマトを乗せたトラックの目撃など、「その土地に根ざした食文化」の風景を通し、**地域と産業の結びつきの強さ**を感じた。



プロシュット・ディ・パルマ産業



ランギラノの生ハム工房分布図
作成：田中碧衣



生ハムの熟成に必要な
環境を作るパルマ川
(ランギラノ) 撮影：田中碧衣



生ハム工場の見学
スカレーレという木棚に吊るされたハム
(ランギラノ) 撮影：田中碧衣



各種生ハムの実食
専門店で買い揃えた
(パルマ) 撮影：田中碧衣

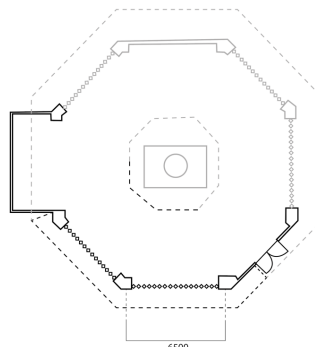


生ハム祭り
ランギラノの工房のブースが並ぶ
(ランギラノ) 撮影：田中碧衣

パルミジャーノ・レッジャーノ産業



カゼッロの跡
(レッジョ・エミリア) 撮影：田中碧衣



カゼッロの復元平面図
作成：田中碧衣



パルミジャーノ・レッジャーノ
(モデナ) 撮影：樋渡彩

ワイン産業（ランブルスコ）



ライン状に並ぶブドウの木
(モデナ) 撮影：吉田真子



収穫前のブドウ
(モデナ) 撮影：樋渡彩



ワインとパルマの
名産品の試食
(モデナ)
撮影：樋渡彩

トマト産業



トマト缶工場
(パルマ) 撮影：田中碧衣



トマトを積んだトラック
(パルマ) 撮影：田中碧衣

パスタ産業



パスタ博物館
(コレッキオ) 撮影：樋渡彩



バリラ図書館職員兼
パルマ食の博物館館長
(パルマ) 撮影：田中碧衣

彼には、パスタ麺のメーカー「Barilla（バリラ）」が経営するパルマの図書館で出会った。後日、生ハム祭りで偶然再会した。

食産業のテリトリー

アマルフィでは、主にレモン産業について調査を行った。アマルフィでは谷という地形を利用して、斜面にレモン畑が広がる。そこで育てられたレモンは、リモンチェッロというリキュールに加工されるなど、**キロメートル・ゼロ**の産業の姿があった。調査中は高台からレモン畑と町の**距離感**を把握した。そして、レモンが「素材」として使われている様々な製品を見たことで、レモン産業がアマルフィに根付いていることを感じた。また、複雑に重なり交差する住宅の合間を歩き、時間の集積に触れることができた。

漁村集落であるプロチダでは、漁業を軸に街を歩いた。舟屋跡のカフェではスケッチや実測を通して漁業が根付いた集落ならではの**空間を知る**ことができた。また、街でタクシーを運転するご老人からプロチダでの暮らしや人生について話を聞いたり、漁師の方による海遊ツアーに参加したり、人との交流を通した漁村集落の姿を知れた。



レモン産業



船から見たアマルフィ
地形と町の形の関係がわかる
(アマルフィ) 撮影：田中碧衣



高台から見たレモン畑越しの町
(アマルフィ) 撮影：田中碧衣



段々畑のレモン
(アマルフィ) 撮影：田中碧衣



町で売られていたレモン
(アマルフィ) 撮影：田中碧衣



アマルフィ産のリモンチェッロ
(アマルフィ) 撮影：田中碧衣

プロチダの漁業



高台から見たカラフルな町
(プロチダ) 撮影：吉田真子



舟屋を改装したカフェ
(プロチダ) 撮影：吉田真子



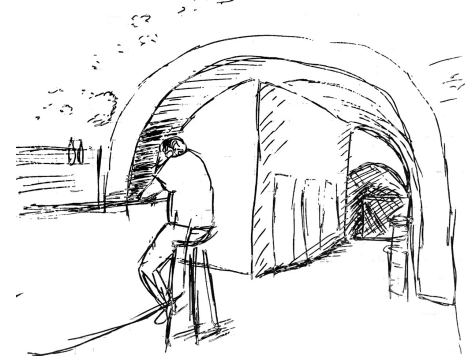
港にある鮮魚店
(プロチダ) 撮影：吉田真子



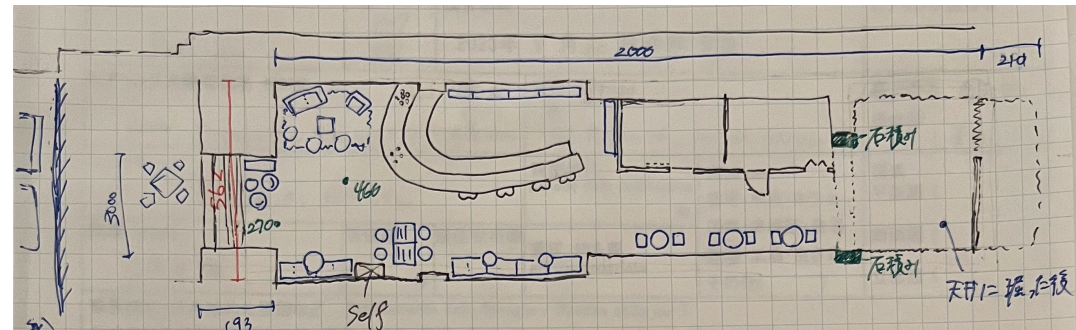
古い地区「Casa Vascello」
(プロチダ) 撮影：吉田真子



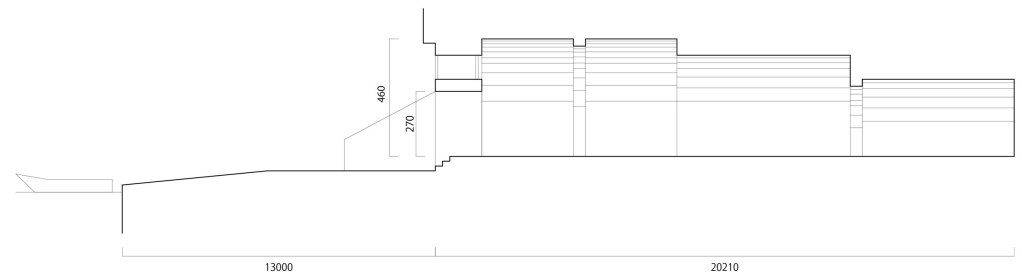
地元のタクシー運転手への
ヒアリング
(プロチダ) 撮影：吉田真子



舟屋を改装したカフェ店内スケッチ
(プロチダ) 画：吉田真子



舟屋を改装したカフェの平面図の野帳 (プロチダ) 画：吉田真子



舟屋を改装したカフェの実測断面図 (プロチダ) 作成：吉田真子

まとめ

田中

このような貴重な経験をする機会を与えてくださった前田記念工学振興財団の助成金採択における関係者の皆様、この調査を含め、私たちをご指導してくださった樋渡彩先生に深く感謝を申し上げます。

私は今回、イタリアの衣食住を五感を使って調査をしたいと思い、調査に参加しました。特に、食文化については、地元住民が通うような八百屋さんやマーケットを訪れ、実際に店主と話しながら食材を買っている馴染客を目撃するなど、日常の風景を見ることができたことが印象的でした。また、生ハムの専門店で様々な生ハムを注文し、量り売りで購入できたことも貴重な経験となりました。パルマではお惣菜店や生ハム、チーズなどの専門店が多く、人々が食にこだわりを持っていることが感じられました。そして、ワイナリーの見学では、ブドウが栽培されている地形や気候、歴史などをこの目で見たことで、食文化と「場所性」の関係がテリトリーを形作っているということを改めて考えることができました。

今後はこの調査で得た経験を、仕事として街づくりに関わり、活かしていきたいと考えています。街づくりにおいて、そこに住む人が何を大切にしてきたのかを見極めることが重要です。そこで、今回ヒアリングをして生の声を聞いたり、現地の日常風景を探した経験から、地域の日常に埋もれた価値を広めることができる人になりたいと考えています。

吉田

この調査研究を通し、その土地の当たり前を受け入れ価値を広げる力がつきました。情報があふれ、どこでも同じものが買える時代に、本当に重要な価値とは何なのかということを強く考える1か月半だったからです。

時間軸の中で都市空間の変化がわかりやすいイタリアでは、歴史と町が深く結びついていることを全身で感じることができました。近代化の中でモノは似通ったものになっていましたが、「場所」には特性がありました。何千年の時間の中で構築された配置や方位、標高などは、場所の価値になっていることに気づきました。特に海と山はその構成要素の中でとても強いエネルギーがあり、それらをつなぐ川は人間の住処を形成し、その上で興る「産業」は風景に彩りを与えていました。人工的でありながら破壊的ではなく、自然と対峙しながら育まれた景観を見ることができ、重要な調査となりました。そして、建築において「人間」は欠かすことのできない存在であることも再認識しました。

広い世界を実際に見れたことで、さらに視野は広がり、世界が近くに感じました。持続可能なまちを育むために必要な基礎を学び取れた大切な機会となりました。これからも海外の町に学び分析を進めていきたいと思います。本研究の発展につながるプログラムとなりましたこと、本テーマを採択いただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。

調査でお世話になった方々

今回、イタリアでは各地で町に住む地元の方や、指導をしてくださっている樋渡彩先生のお知り合いの方など、多くの人にお話を聞き、助けられながら調査を行いました。いきなり拙い言葉で知らない外国人が話しかけたにも関わらず、自分たちの人生や住んでいる場所について、快く話してくださいました。皆様のご協力のおかげで、私たちの経験や知識がより深く濃いものとなりました。この他にも博物館や文書館、図書館でも、多くの方々が親切に接してくださり、貴重な史料を提供してくださいました。皆さんに出会えたことはとても幸運です。本当にありがとうございました。



Alberobello



Cisternino



Napoli



Napoli



Procida



Procida



Modena